追憶　軍都高田

さいたま市　安藤三郎（東本町三丁目出身）

はじめに

贅沢はどうのという話になった時「戦時中銃後では…」というと「ジュウゴとは何ですか」と質問されてしまった。広辞苑では「戦場の後方、直接戦闘に加わらない一般国民」と示されている。そこで何人かにこの言葉を尋ねてみたら五十歳以下の人は殆ど知らず時代の変遷を痛感した。

高田商業高校のある一帯はかつて五十ha（一五万坪）の農地だったが、明治末期第十三師団高田移駐時に練兵場となった。練兵場の東南の地蔵宮（軍隊では勇みが丘といった）には杉の大木が繁り、その北方に連隊名からの「五八の森」と名付けられた木立があった。演習のない時は一面が子供の遊び場所となった。戦後は食糧増産の為農地転換への再開拓が行われ入植者が鍬を振ったが、企業の進出、学校の移設更に宅地化へと変っていった。

銃後という言葉の認識変化と同じように高田にかつて軍隊があり其処で鍛えられた越後健児の懸命な努力も、やがては地元の人達にも忘失されてしまうのではないかと思い、文献と見比べながら記憶を呼び戻す事にした。

五八の森

高田にあった軍隊とその略史

幼い頃から高田の軍隊といえば先ず歩兵三十連隊と現在の自衛隊駐屯地にあった独立山砲兵第一連隊（通称山砲隊）であった。

山砲隊では祝日になると外堀の所の道路に砲列を敷き西方に向けて祝砲を射っていた。

三十連隊については軍旗祭の賑わいや小学生の頃、銃後国民の感謝を込めての合唱を連隊本部前で行った事を想い出す。

南本町三丁目通りから南新町に通ずる道路の中程東側に石碑がひっそり佇み、それには三十連隊、五八連隊それに一三〇連隊名が刻まれている。南新町が兵舎であった頃、そこから越後健児が厳しい訓練の後巣立ったとの碑である。以下その三個歩兵連隊略史を記する。

独立山砲兵第一連隊

歩兵第三十連隊について

明治二十九年新発田歩兵第十六連隊内で編成、第二師団隷下となり明治三十年村松へ移駐、明治三十一年軍旗拝受。日露開戦により三十七年二月村松出発第一軍隷下に入り（軍司令官黒木大将）、鴨緑江渡河、緒戦の九連城、遼陽、沙河、黒溝台、奉天と連戦する。明治三十八年二月凱旋村松へ帰還。この間弓張嶺の夜襲を始め各戦闘の偉勲に対して軍司令官より二回感状を授与された。

明治四十一年第二師団から第十三師団の隷下に入り、大正二年四月満州へ大正四年六月村松帰還、大正十四年五月第二次軍縮による第十三師団廃止に伴い第二師団隷下になり、高田へ移駐した。

昭和六年四月満州派遣同年九月満州事変勃発旅順出発各地の戦闘に参加、昭和八年一月高田へ帰還。昭和十二年四月満州　派遣となり新潟港から出港警備任務につく。同年七月支那事変始まり北支

安藤三郎さん

に出動鉄角領（軍司令官より感状授与）、原平鎮、大原等の戦闘に参加十二月駐屯地五常とハルビン帰還。昭和十四年七月緊急派兵によりノモンハンに出動し十月駐屯地に帰還した。

昭和十五年八月第二師団から新設の第二八師団に編入されハルビンに移駐したが、昭和十九年七月釜山経由で宮古島に上陸、米軍上陸に備えていたが敵上陸なく、昭和二十年八月十五日を迎えた。

歩兵第三十連隊

歩兵第五八連隊について

明治三十八年七月東京に於て編成八月軍旗拝受同日宇品出港第二軍戦闘序列に入る（軍司令官奥大将）。同年十月第二軍を離れ韓国守備の為平壌に駐屯、明治四十一年第十三師団高田移駐と共に高田に入る。大正二年渡満同四年高田帰還。同九年シベリヤ出兵同十年帰還。

大正十四年五月第二次軍縮により十三師団と共に廃止となり軍旗奉還した。

昭和十二年日支事変の為、師団と共に再編成軍旗再拝受し上海に上陸。上海、徐州、武漢、宣昌などの戦闘に参加した。

昭和十八年一月南方派遣の為呉淞（ウースン）出港シンガポールに上陸、ペーマー半島イポー付近の警備に当る。昭和十八年三月第三十一師団に編入、ビルマ方面作戦に参加する。インパール作戦では要衝コヒマを作戦開始後パトカイ山系二七〇㎞を踏破し僅か二十日で占領した。インパール占領は不成功ではあったが撤退に当り一兵も残さず退いた。その後各作戦に参加し、苦しい体験を重ねたが八月十五日を迎えた。

歩兵第一三〇連隊について

この連隊の存在は前述『高田にあった軍隊とその略史』での石碑を見て初めて知った。第四十二師団の編成は昭和十八年六月とあるがその基幹の独立歩兵団は昭和十六年に既に設置され、軍旗も下賜されたとある。基幹歩兵団は一二九連隊（若松、一三〇連隊（仙台）、一五八連隊（山形）とあり、昭和十九年三月中千島派遣ついで北部北海道警備となり一〇〇を加えた一三〇を連隊名とし業務処理を行う予定が、その後仙台へ移管とあるのは情況変化に対応する為だったのではないかと私は推察する。留守三十連隊長は山崎保代大佐であった。山崎大佐はその後仙台に赴任され、昭和十八年五月アッツ島で残兵二〇〇〇の先頭に立って最後の突撃を行い玉砕された。大本営発表で玉砕という言葉は此の時が初めてである。戦死後二階級特進で中将になられた。

両連隊の高田駐屯期と評価

連隊の創設は三十連隊が早いが高田駐屯は五八連隊が先で、明治四十一年から大正十四年の間、三十連隊は十三師団廃止に伴い二師団に移り村松から高田に移駐した。その後昭和十五年八月第二十八師団に移ったので、郷土連隊としては約十五年間となる。第二十八師団に移った事を知らなかったので終戦まで連隊といえば三十連隊と想っている人が殆どであろうと思う。

両連隊の評価は『兵隊たちの陸軍史』（伊藤桂一、新潮文庫）によると、精強部隊程激戦を重ね悲惨な損害を受けるのが常であるが、その故に三十連隊は激戦を予想される宮古島配備となったが、米軍の直接沖縄へ上陸によりそれを免れた稀な例としてある。ちなみに精強なゆえ悲惨な損害を受けた例は新発田十六連隊である。ジャワ作戦で偉功をたて慰労の為内地帰還の予定がガダルカナル戦況不利の為、急遽救援に投入され広安連隊長以下二二〇〇名もの戦死者を出した。

五八連隊については、十三師団からの越後健児集うも「如何に五八の兵とても山砲一門・弾薬三発では如何せん」とコヒマの決戦での苦闘を述べ、その栄光は世界戦史に不滅と記してある。名将伝に名を連ねる宮崎繁二郎少将（後中将）は五八連隊を手兵として撤退指揮をとられたという事を読んだ事がある。状況不利な場合の退却は困難を極めると聞いているが我が越後兵に全幅の信頼を掛けられていたのである。

第十三師団高田移駐時の各隊の位置

斉藤真一画伯の越後瞥女日記の大正二年頃の高田市図によると、十三師団司令部は本丸に、その南側の現在図書館のある一帯に騎兵第十七連隊、自衛隊駐屯地には野砲兵十九連隊、高田高校の西側に師団長官舎がある。南新町には歩兵五八連隊があり、そこに何故か歩兵第二六旅団も記入ある。五八連隊の南側の練兵場通りを東に進み青田川を渡ると輜重第十三大隊があった。師団廃止後歩兵第十五旅団司令部（所属第十六、三十連隊）は高田にあり、本丸に入ったものと思われるが私にはその記憶はなく、徴兵業務等を扱う連隊区司令部

があった事は知っている。

なお師団在中の著名軍人には師団長では第三代目の長岡外史中将、在任明治四十三年から大正二年（この時オーストリヤのレルヒ少佐金谷山で日本にスキー紹介）、第四代は日本騎兵の父と呼ばれ日露戦争では無敵と称せられたコサック騎兵と、寡兵ながら従来にとらわれない柔軟戦術によって対等以上に戦われた秋山好古中将（後大将）、在任大正二年から大正四年がある。又野砲兵第十九連隊には明治四十三年から一年余り、若き日の蔣介石が留学していた。

故・野口春雄大先輩について

Jネット会員であった大先輩は昭和十三年一月十日三十連隊に入営現役満期後二度召集を受けられ、幾多の苦闘の体験を重ねられ終戦後南支広東から帰還され昭和二十一年五月十七日浦賀に上陸軍籍を離れられた。大先輩は軍隊手帳（写し）と遺稿ともいえる『残り桜』を私に手渡して下さった。精強な郷土連隊員は多くの苦闘を乗り超えられたがそれ等の方々の代表として大先輩の軍隊手帳と遺稿から軍歴、ノモンハン事変、終戦後の苦闘を偲ぶ。

故・野口春雄さん

軍歴

昭和十三年一月十日歩兵第三十連隊入営渡満。九月一日仙台予備士官学校入校。

昭和十四年三月十五日卒業、同日見習士官、四月一日新潟港から渡満、三十連隊に転属、牡丹江付近警備、八月ノモンハン事変に出動、十一月十五日現役満期、即日召集、陸軍少尉。

昭和十五年八月三十日連隊は第二師団から新編成の第二八師団隷下となりハルピンに移駐、師団長副官、初年兵教官。

昭和十六年二月五日東部第二部隊に転属二月二十四日召集解除。

昭和十九年一月二十一日東部第二十三部隊（新発田）に召集、二月二十二日新発田出発釜山、山海関、上海、高雄（台湾）を経て三月二十一日広東省黄埔上陸、九月十五日陸軍中尉。

昭和二十年八月十五日終戦。八月二十日陸軍大尉。

昭和二十一年三月二十九日内地帰還の為黄埔出港五月十七日浦賀上陸、召集解除。

ノモンハン事変での苦闘

昭和十四年五月満蒙国境でソ連軍との間に衝突発生、六月上旬までソ満国境東部に於てソ連牽制の大演習に参加、八月二十六日ノモンハン出動、列車を降りてからは昼夜を分たぬ三日二夜の行軍、炎熱、重装備の為落伍者続出、脂汗を流しだしそれが出なくなると塩で塑像のようになったり鼻血を流したりする。時には一ヶ中隊で数名にもなった。中隊長はうずくまる兵を起し肩にかけたり、食べる元気もなくなった兵に小隊長自ら箸を取って食べさせた。大先輩小隊長は落伍者続出の為軽機関銃を自ら担いだが一〇〇m も歩かないうちに痙攣を起し、代った下士官も歩く力がなかった。大先輩も軍刀を捨ててと思われると述懐しておられた。中隊幹部も部下の兵を失い掌握困難を続けたが、九月十六日の停戦の日まで小雪ちらつくホロンバイル高原で寒さと敵戦車相手の戦闘が続くのである。

大戦終戦後の苦闘

昭和十九年一月の召集後南支広東黄埔上陸とあるが、此の頃制空権を失っていたので、南方戦線確保の為の要員補充は支那大陸縦断陸路輸送によらざるを得なかった。台湾経由で行先不明のまま一月半後の広東黄埔に上陸し付近警備や中支方面への北上作戦に中隊長として三回出動したが、無線機も故障がちで信じられぬ事だが、八月十五日の終戦も敵方から知らされる始末だった。

八月二十一日中国軍から通訳を通じて武装解除の連絡があった。無線機の故障で司令部からの連絡もない。大決心をして上部からの命令がないから解除には応じられない。やりたければ武力で解除せよと回答したが内心はピクピクだった。二日後敵軍使から「会いたい」と連絡があったので死を覚悟の上それを承知した。ただその地点は我が迫撃砲の射程内地点で八月二十四日午前十時と指定した。万一話し合いが不利の場合は拳銃発射と軍刀抜刀を合図に大先輩諸共敵軍使一行を砲撃せよ、後の指揮は小隊長一任として、曹長と当番兵の三名で着弾地点に赴き敵軍使一行を待った。十時と指定したのは太陽を背にし照準しやすかったからであった。

五十名以上の武装兵を率いる軍使は当然ながら解除を迫ったが、先に通告した内容と変らぬ回答を行った。更にどうしてもというなら我が迫撃砲数門が既にこの地点に照準を合せて私の指示を待っている。我々は上部からの命令がない限

りこの警備地を死守すると回答した。軍使は日本の陸士に在籍した事のある中佐で日本軍が指揮命令を重んじる事を知っていたからか、一応時機を待つ事を約束してくれた。軍使は部下に鍋やチャンチュウ等の用意をさせ、会食を共にしてくれと云うのでそれには応じたが、敵に囲まれての会食は余り気分のよいものではなかった。十二月に入り中国軍に従えとの命令が来た。

撤退に当り中隊の終結地点芝の武器携行は中国側も認めたが、残余の武器被服の受渡しは難行した。早く部隊主力と合流しなければ支障が出る事、部隊全員の軍隊手帳、各中隊の功績名簿、その他人事関係重要書類を全部持っていてそれらを各隊に返さねば帰国業務に大支障をきたすので、あせるばかりだった。

何日も交渉進まず当方通訳に相談したら二割程減じた員数表を提示してみたらといった。二割は中国軍幹部への賄賂であった、我が軍では思いもよらぬ事だったが早く主力部隊と合流せねばならぬので、その通りの表を提示したら直ちに諒解となった。翌日六㎞程行軍し広東への中間駅に到着し軍人の駅長に広東行きの貨車四両準備を交渉した。この時は将校行李約三十個があったのでそれから軍服一着と細かい私物を残し、駅長にやり交渉に当った。それでそこでの一日夜営で翌日列車が到着約二時間半の後広東に到着出来た。直ちに参謀部に連絡少佐参謀の出迎え受け「よく広東に来られたなあ」と感心され喜んで貰ったが、私としては必死だった。少数人員が他部隊の指揮下に入ったらどうなっていたかは判らない。重要書類の受渡しや病兵についても同様でいろいろな思いで独断専行でこの道を開いて来た。

軍参謀の案内で五ヶ月振りに部隊復帰単独任務から解放されたが、十二月初めから翌年三月下旬まで一日粥二食の俘虜生活が続く事になった。

大先輩の苦闘を偲び

私（安藤）は昭和十九年十月二十日新発田歩兵第十六連隊に現役兵として入隊した。それまで兵役義務は二十歳からであったがこの時から十九歳となった。入隊の為高田駅に集まったのは十余名であった。同時入隊者は五〇〇余名であった。私を含むごく少数の教育要員を残し十九年十二月五日深夜新しい夏服を着て転属して行き二十年一月三日福建沖で輸送船が爆撃を受け全員海没した。それからの教育は連日の猛吹雪の中で外套手袋なしで行われたが終戦後まもなく復員となった。大先輩は私より早く昭和十九年一月同じ新発田に応召され大陸縦断敵の制空権下上海、台湾高雄経由で南支広東付近におられ生死をかけて任務に励んでおられたのである。猛吹雪中の訓練は辛かったが生死をかけての任務とは比較にならない。改めてその労苦とそれを貫かれた野口先輩の意志に深い敬意を表する。

さまざまな想い出

練兵場は子供の遊び場所でもあった。農家の人達が長い柄の鎌で円を画くようにして草刈をしていた。堆肥にするであろう。国民の献金による飛行機の献納に対する感謝の意を表す飛行機が三機程着陸した事があった。布貼り単葉機で翌年四月号とよう番号がついていた。昭和十六年九月上越の中等学校連合演習が関山演習場であの終ると関山から夜行軍で高田へ、学校でゴロ寝し、翌日練兵場で閲兵が行われた。

昭和十二年の五八連隊再編成の時であったと思う。兵舎が満杯の為か市内各戸に何名宛かの応召兵宿泊が行われた。我が家では二名だった。日露戦争に従軍した父は其神でもある直江八幡様の氏子の家から一人の戦死者もなかった。無事に帰れますようにといって大切にしていた図嚢を磨き贈り励まされていた。二年程してその二人の方は無事に帰りましたと挨拶に見えた。東京在住の方だった。

小学生の時三十連隊本部前に整列感謝の合唱を行った。賑やかな軍旗祭の時直立不動で軍旗奉持の連隊旗手に感動した事もあった。

山砲隊については昭和十七年十月二泊三日の営内宿泊を行い見習士官、上等兵二名が指導に当られ食事準備、寝具整理等を教わり不寝番勤務もやった。酒保にも行き饅頭（十銭三個）を食べた。兄は山砲隊に入営し間もなく中支に向った。山砲隊には馬が沢山居てその馬糞を使ってマッシュルームの栽培をする農家が連隊の東側にあって、見学に行った事がある。

戦争拡大と共に遺骨の帰還が多くなった。早朝帰還の時は市内居住の生徒は服装を整え遺骨の出迎えをした。その場所は旧高田市役所前の君の井酒店の付近であった。駅から連隊まで白布に包まれた遺骨は粛々と進んだ。慰霊祭で追悼喇叭の『吹きなす笛』は心に深くしみ入る悲しい曲であった。

参考文献

『兵隊たちの陸軍史』伊藤桂一　新潮文庫

『日本陸軍がよくわかる事典』ＰＨＰ文庫

『わが軍隊』ノーベル書房

『ぜめぎあう地域と軍隊（高田）』河西英通

『坂の上の雲』文春文庫

『越後瞽女日記』斉藤真一